

令和5年度 第1回まんが王国・土佐推進協議会総会 概要

日 時：令和5年9月22日（金）13：30～15：00

場 所：高知県立高知城歴史博物館ホール及び ZOOM

出席者：まんが王国・土佐推進協議会委員14名（うち1名は代理参加、1名はオンライン参加）、監事1名、オブザーバー1名（オンライン参加）

（1）会長挨拶

（2）議事

次の議案について事務局及び監事から説明があり、承認された。

第1号議案 令和4年度まんが王国・土佐推進協議会事業報告

第2号議案 令和4年度収支決算報告

（3）報告事項

次の報告事項について、事務局から説明が行われた。

第1号報告 令和5年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

（4）協議事項

次の協議事項について、事業推進部会からの説明の後、意見交換が行われた。

第1号協議 令和6年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

・事業推進部会からの提案（事業推進部会長）

【5】その他

次の事項について、事業推進部会から説明が行われた。

・事業推進部会からの報告（事業推進部会長）

【6】閉会

第2回総会は、令和6年2月に書面での開催を予定

第1号議案 令和4年度まんが王国・土佐推進協議会事業報告

第2号議案 令和4年度収支決算報告

委員一同承認

第1号報告 令和5年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

事務局より説明

第1号協議 令和6年度「まんが王国・土佐」ブランド化の推進について

事業推進部会より説明

【A 委員】

- 開閉会式で大ホールを利用したことでまんが甲子園のプレゼンテーションが上がった。
- 講評も全作品にあったということで、参加者も思考の機会があったのではないかと思う。
いい取り組みであるので、継続してほしい。
- 「甲子園」と名の付く大会の中で、賞金を明示することに違和感を感じるので、副賞（賞金）の金額の表示の仕方について検討してほしい。

【B 委員】

- 一般来場者を増やしていく狙いを聞きたい。また、来場者が増えることを実際に高校生が望んでいるのか。
- 会場がかかるばーとに戻って、競技会場としては狭かったと思うが、作品を制作する高校生の邪魔にならないか。

【事務局】

まんが甲子園自体は第一義的には教育的効果というところで開催している。

一般来場者に来ていただくことで、参加する高校生も勇気もらい、元気になって作品制作につながると思っている。

会場については、開閉会式を2階大ホールで、作品制作については7階で実施し、イベントと競技の部分で会場を分ける工夫をし、できるだけ効果的な大会にできるように努めた。

【事業推進部会長】

まんが甲子園は競技大会なので、生徒たちが競技に集中できる環境づくりはとても大切だと思う。例えば漫画家がジロジロ見られながら描くか、というとそうではない。制作と

いう意味ではクローズドの方が良いかもしれない。

一方で、甲子園という名前もついているとおり、盛り上がりをだしていきたいところもあり、見てもらう人も増やして認知度をあげ、まんが王国・土佐を知ってもらうという意味での課題だと思う。

生徒の邪魔もせず、沢山見てもらえると言う意味では、オンライン視聴の方が向いているかも知れない。

【C 委員】

- 参加校の減少について、東京の美術系の中学校、高校を一本釣りしてはどうか。
- 6月に女子美術大学の理事に就任し、中学生、高校生に特別授業をしており、まんが甲子園の話をするが、生徒達はピンとこない。まんが甲子園を知るツールが欲しい。
- 中学校、高校に行って、説明をして参加校を一本釣りで増やしていく方法が一番よい。宣伝と説明を地道にやっていった方がよいのではないか。
- 東京には美術系の学校が増えていて、女子美術大学の附属中学校・高校の生徒数は併せて1,200人いる。年々入学希望者が増えていて、美術系を目指す人が増えている。おそらくその中には、漫画家を目指す人も増えている。

【事務局】

現在、文書で案内するだけでなく、過去に参加していただいた学校に重点的にアプローチするなど、参加校を増やす取り組みを続けている。

海外についても、姉妹関係や交流関係がある韓国や台湾など、つながりがあるところを使って広報もしているところ。ご意見も踏まえて、さらに参加校を増やす取組を続けていきたい。

【D 委員】

- 参加校について、対象校と言われる、美術部などまんが関連の部活動が6,000校あるとのことだが、それに対して参加200校は少ない。
- イベントの完成度や出版社の協力でスカウトシップ等もある中で、参加しない理由は見つからない。旅費も高知県が負担してお金の心配も無いなかで、まんがを描く方は絶対に出たいイベントだとも思う。
- 描き手へのリーチは非常に難しいと思う。
- 読み手と描き手はほぼ一緒だと思っているので、例えば協力してくださる出版社の雑誌のなかで、「まんが甲子園をやっている」とアプローチを広げることによって、出版者も漫画家の卵を獲得できてwin-winだと思う。
- コミケのような漫画好きがあつまるところなど、1 to 1の施策に加えて、広範囲に読み手にリーチできるようなプロモーションをすればいいかと思う。
- 同様にコミックマーケットから発出すれば、海外にもリーチできると思う。

- 視聴者数について、昨年から非常に減ったということで、仮にエラーになっていなければ昨年度を超えていたのか。昨年はニコニコ生放送の1社で特別な協力もいただいていた。

【事務局】

出版社にはご訪問も含めて色々な話をさせていただいている。

その機会のなかで検討していただけるようにアプローチを進めていきたい。

視聴者数に対するエラーの影響については検証できていないが、来年は今年の実績を踏まえてトラブルのない配信ができるようよう、運用を検討する。

【E 委員】

- まんがを利用した教材の利用促進について、今の教科書にもまんがが掲載されている。4コマまんがを使って話を作ったり、中学校の美術でまんがの描き方の効果などが取り上げられていて、まんがの教育的な価値は社会的に認められている。
- 独自のまんが教材を作成して各学校に広めているが、今一つ、活用が広がっていない実態がある。教員にヒアリングした結果をお伝えする。
「まんが教材を活用することで子ども達が興味関心をもつことはある。」
「宿題としては子ども達に提供できるが、授業でどう活用するか、研究が足りていない。」
- 実際に学校、あるいは教育の研究団体と一緒にどのように活用するか研究をしてはどうか。
- また、まんが甲子園などの機会に「まんがと教育」をテーマに教員と講演を実施してはどうか。
学校教員や保護者に対してまんがを使った教育の啓発になるのではないか。

【事務局】

教育委員会事務局と協力して検討していく。

【F 委員代理】

- 大会参加校の伸び悩みということだが、KPI といつか、MAX ではどの位を想定しているのか。
- PR をしすぎて、増えすぎてしまうと逆に大変になるのではないか。
- 参加校数の増加、技術力の向上についても触れられているが、どうか。

【事務局】

参加校数については、過去の参加校数を目安に300校を目標として設定している。

作画の技術力の向上については、小中学校向けにはまんが教室を開催していて、高知まんがBASEでも作画教室を実施している。高校の部活動対象での技術力の向上については、高校生対象のまんが教室を検討している。

【G 委員】

- まんが甲子園で高校生スタッフとして、生徒達の活動の幅が広がった。
- まんがを学ぶ場の拡充のなかで、高校生対象のまんが教室について、高校の「漫画部」は沢山あるわけではなくて、実はコロナの影響でまんがを教える先生が異動したり、活動が十分にできない状況もあり、次の世代が育っていない感じがする。
- 生徒の嗜好がまんがからイラストレーションに変わっている状況がある。
- 学習指導要領の芸術科、科目として美術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがあり、美術Ⅰの内容にまんがについての指導事項がある。
- 高等学校の指導事項のひとつとして、まんがは取り上げられている。部活動だけでなく、教科・科目に対しての講師の派遣の可能性があると考える。

【事務局】

先生方が集まる場面で周知していきたい。

派遣については、教育委員会事務局との連携も含めて相談させていただく。

【H 委員】

- まんが甲子園の会場では高校生たちのすごい熱気を感じる。
- 700 人の入場者のうち、父兄や関係者を除いた、本当に興味がある県民がどれだけいて、もともと「まんが王国・土佐」を認識している県民がどれだけいるか。
- 年 2 回のまんが甲子園と全国漫画家大会議だけでは、高知県は「まんが王国・土佐」であるという気になるとは思えない。単発になっている。
- 継続してやっているが、広がりをもっと県民にしっかりアピールしてほしい。
- 日本全国にも、県をあげてやっている、県民も自信をもってまんがを良く読んでいるというような事を発信してほしい。
- まんが甲子園は回数を重ね、過去を含めてかなりの参加校数になっているはず。一回きりの応募ではなく、事務局から連絡をとって、つながりを継続していく必要がある。
- 県内で出場している高校同士の連携も普段から構築して、広めていくことが大事。

【事務局】

参加校を増やすために県外に PR していたが、県内での取り組みも行う。

まんが甲子園を対外的にプロモーションできる動画素材を作っており、完成したら県外だけでなく、県内にも PR をしていく。

参加校との連携については、意識して取り組んで行く。

県内は参加校以外にも、高校生スタッフとして参加している学校もある。連絡をとりあって連携について検討していく。

【I 委員】

- まんが教材を利用して、学校の授業の中にまんがを取り込んでいく取組を実施した。

- まんがに興味があり、まんがを使っていこうという先生がそもそも少ないが、一般科目ではなく、特別支援学級の先生方に興味をしめしていただいた。
- 一昨年は県の教材を使おうとしたが、いざ本当に授業と照らし合わせて考えた時に、大半が授業では使えず、学校の教員の意見を聞きながら、もう一度練り直して中身を精査しないと授業として使えないと感じた。
- 一般参加者の話がでたが、一般参加者は会場ですることがない。
例えば、俳句甲子園だと目の前で作品ができて、鑑賞者の目で評価したりできるが、まんがは描き上がるまで数時間あり、作品もさらっと発表される。
描く方は一生懸命描くが、読み手である参加者は特にすることもなく、発表も賞の発表があるだけ。特別なプログラム、イベントがあれば別だが、今の競技形式だと難しい。
- 昭和 58 年、高知県が国民休暇県の取組のなかでの第 1 回高知まんがフェスティバルの資料を整理するなかで、ある新聞記事を読んだ。
今は描き手を育てることに特化して進んでいるとおもうが、当時はそんな狭い取組ではなく、高知県は経済的なこと、学習的な事、人口等の統計をとると最下位になることが多いなか、漫画的なユーモアを交えた発想で県政を浮揚させようという目的のもと、まんが王国の取組が始まっている。
漫画家を首都圏から 2、3 日イベントで呼んできてもまんが王国にならないので、県民がユーモアやユニークさを持って色々な事に取り組んでいくのが大事だ、という主旨。
- 読み手があつてのまんがでもあるし、日常生活の中にまんががある高知県であつて欲しいというそもそもの取組もあつたようなので、そのあたりも参考にしたら良いのではないか。

【事務局】

まんが教材の練り直しについては、県教育委員会と連携して検討を深めていく。
一般参加者にも楽しんでもらう取組については、現在もステージイベント等を実施しているが、来年度以降、たくさんの方に楽しんでもらえるような演出等を考えていきたい。
描き手を育てる部分について、まんが甲子園に高校生に参加していただくというのは、発想力、想像力、表現力や協調性を学生の皆さんに身につけていただくために取り組んできたところ。
結果としてプロになる方が出てくるのは喜ばしいことだが、一つはそういった教育的効果が大きな視点としてあつたかと思うので、そういった視点を踏まえて第 33 回大会以降もよりよい大会にできるようにしたい。

【J 委員】

- 今年のまんが甲子園は予選応募校が海外を含めて 210 校だが、全校に終了後作成されるレポートブックは届けられるのか。
- 主な課題はずっと同じ内容で繰り返されていると思うが、地道に成果をあげてきている

ことについては、感謝したいと思う。

- まんが甲子園のブランド化について、長くやっていることには発祥があって歴史がある。そういったものを形にした方がよいのではないか。
- 過去、まんが甲子園には、自由漫研運動という活動があったが、今の高校生は知らないのではないか。まんが甲子園を始めて何年か後、一度9月開催に変更になった際に、高校生達が「我々が主役の大会では」「夏休みでないと困る」ということで街頭で署名活動等を行って8月開催を勝ちとった。すごく主体的な熱量、その精神、歴史を伝えていくのも必要かと思う。それを漫画でつくるのがよいと思う。
- 高校生がまんが甲子園を誇りに思うような基盤をつくりたい。
県民全体が応援して「高知にはまんが甲子園がある」という県民意識がないと全国・海外にブランドとしてPRできないのではないか。
- 出場校の地元ももっと盛り上げて欲しい。本選出場校の地元市町村で壮行イベントをするとか、戦ったという実感を高校生に与えてあげてほしい。当事者たちから主体者として応援する機運を盛り上げてくれたらと感じる。
- 一般来場者について、ライブドローイングはレアなので、お客さんに喜んでもらえると思う。夏休みは親子でいくところを探している。ちょっと入って高校生の熱を感じてもらうために、お絵かきコーナーは人気がある。親子で楽しめるスペースがあれば来やすい。液晶タブレットの体験ブースに子どもを呼べれば次世代の育成にもつながるのでは。
- コンビニのレシートに広告印字ができると聞いた。どういう条件でだせるのかはわからないが、話のもっていきようではできるのではないか。全国漫画家大会議でも活用できるのでは。
- 来てくれた方に抽選でノベルティが当たるとか、集客はいろいろな方法がある。
また、ゲスト審査員のまんがをラテアートにして提供できれば楽しいと思う。
- 人材育成について、高知まんがBASEがキャパオーバーになりつつあるということだが、例えば龍馬学園との連携授業とか、まんが甲子園の出身でプロになられた方の生の声を取り入れられると学生の力になるのではないか。
- 教材の活用について、まんがが脳を刺激することは、まんがに限らず全般的に役に立つことだと思っている。
先生は1年間のカリキュラムのなかに新しい教材をとりこんでいくのは大変だと思うが、まんが王国というからには、授業で使って子どもの底力がアップしたということを実証できたら、まんが王国の力になると思うので、色々と改良等して頑張ってもらいたい。

【K 委員】

- まんが甲子園の審査員をやっているが、年々レベルが上がり、素晴らしい作品が集まっているので、審査員としては非常に嬉しい。
- ある高校生が、高校3年間しかでられないことを残念がっていた。

後輩達がどんどん出てくることに期待したい。そのためには、小学生、中学生に教えなければいけない。

- まんが教室や世界まんがセンバツからでてくる人たちも参加させてあげたい。
- 優秀な漫画家としての自覚をもって参加してほしい。そしてその中から立派な漫画家が生まれてほしい。

【L オブザーバー】

- 文化庁で、多くの地域の皆さまの支援をしており、継続していきたい。
- 皆さまのご意見を地域の中でのご意見として、地域の中での連携、多くの方に参加していただく具体的な提案をみせていただいて、来年度以降にも状況を伺いながら繋いでいきたいと考えている。
- 人材育成については、文化庁の中でも悩んでいるところ。参加者数だけではなく、中長期的な視点の中で人材育成をしていく必要性を説明していくことについて悩みがある。
例えば、長年にわたる取組のなかで、過去参加された方々がどのような活躍をしているのか、フォローしているのか。
そういった取組を通じて、ブランド化につなげていくのが可能なのかを今後もお聞きできればと思う。